

戦争という環境と幸せという環境

我孫子第一小学校6年 塚本 菜穂美

わたしは、2枚の写真を見て、とてもおどろきました。それは、原子ばくだんによって焼け野原になっている広島と、長崎の写真です。

その写真の説明書きには、

「投下から数年以内に、広島では20万人以上、長崎では14万人以上の人々がなくなると推定されています。」

と書いてありました。わたしはこんなにたくさんの人がなくなってしまったんだ…と思いました。初めて知ったため、その数の多さにおどろきもしたけれど、悲しくなりました。戦争の恐ろしさを実感しました。

わたしのおじいちゃんも、若いころ戦場へ送られました。そして、無事帰って来ると、家族が全員死んでいたそうです。

こうして戦争によって辛い思いをしてしまった人がたくさんいるんだな、と思いました。今でも心がキズついている人が、たくさんいるんだなと思うと、とてもかわいそうです。

罪のない人まで、無差別に殺してしまう戦争は、とてもざんこくだと思います。こんなに失うのに、何を手に入れたかったんだらう、何を守りたかったんだらう、不思議になってしまいました。そして、何を手に入れられたのか、わたしには失ったものが多すぎてわかりません。

わたしだったら、いきなり親が死んだりしたらどうなる？大好きな音楽も絵も楽しめなくなる体になってしまったらどうする？怖くて考えられません。その怖さを実際に体験した人がいるにもかかわらず。

でも、そんな意識がないのも、わたしたちのまわりの環境が豊かなおかげだと思います。

「太平洋戦争」という辛い過去を忘れずに、今後こんなことを二度とおこらないようにしたいです。

最後に、今の幸せな環境をつくってくれた人たちに、とても感謝します。

次は、わたしたちの番です。わたしたちが豊かな環境をつくり、楽しい未来をきづけるようにがんばりたいです。

ありがとうございます。

みんなが平和でいるために

我孫子第二小学校5年 藤原 淳寛

「なんだよ。」

体育館に行くために、ろうかに整列しようとしたその時だった。いきなり肩をドンと押され、ろうかに出された。

「アツターが足を踏んできたからじゃあないか。」

友達が言ってきた。そして僕の腕をバシッとぶってきた。ぼくもバシッとやり返した。

「やめろよ。」

周りで見えていた友達が、けんかになったぼくたちを止めに、2、3人入ってきた。それでもまた返すために、友達が追いかけてきた。ぼくが逃げようとしたその瞬間、先生に見つかった。

「なにやってんのそこ。」

と、ぼくも友達も先生に怒られた。

なぜけんかになってしまったのだろうか。

原因は、ぼくが友達の足を踏んだのを気づかなかったのと、友達が先に「踏んだよ。」と教えてくれなくて、ぼくのことを押したからだ。

ぼくは思った。足を踏んだことに気づかなかったぼくもいけないけれど、なぜ踏んだことを教えてくれなかったのかと。

「どうして暴力しか出来ないんだ。」

ぼくはあまり怒らないようにしている。その理由はけんかをしたくないからだ。自分は足を踏まれたら、

「踏んだんですけど。」といつも相手に言葉で伝えている。そうするとほとんどの人が

「ごめんね。」

とやさしく返してくれる。

やさしく言うとやさしく返ってくる。

ぼくが友達の足を踏んだ時に、

「アツター、ぼくの足を踏んだよ。」

と一言教えてくれれば、

「ごめんね。」

とやさしい気持ちで返せたのに。

悪気がない時はすぐにあやまった方がいいとぼくは思っている。

今、世界のどこかで戦争がおきていると、お父さんから聞いた。昔の日本も戦争をしたとおばあちゃんが教えてくれた。

戦争はなぜおこるのか分からないけれど、戦争も言い争いから始まると、この経験からぼくは考えている。

互いの心を分かち合えば戦争もなくなる。

心を広くすると、なんでも受け入れられる。自分の意見が正しいと受け入れようとしなないとけんかがおきる。互いのことを思いやれば、争いもなくなる。国と国との間のことも同じように考えられると思う。おばあちゃんはお兄さんを戦争で亡くしている。家族を亡くすなんて、とてもかわいそうだと思った。おじいちゃんは、ぼくだんで家が燃えて住む場所もなくなってしまったそうだ。今のぼくには信じられないことばかりだ。

戦争は何一つよいことがない。だから戦争をおこさないためにも、お互いのことを思いやる気持ちが一番大事だと思う。

おたがいを理解し助けあう世の中に

我孫子第二小学校6年 木内 美友

私は、日本にも、60年前に戦争が起きていたと知って少し信じられないような気がしました。今の私たちが住んでいる町のことを見ても、自分の家の生活の便利さ、電気製品の発達などを見ても、私の生活を考えても、とても信じられません。

私は、この前、テレビで一面焼け野原になってしまった広島映像を見ました。また、学校の授業で先生から東京大空しゅうの話を知りました。とてもおどろきました。私なら父や母、そして兄弟をいっしょんで失う状況にあったら、自分一人でどうやって生きていこうかわかりません。そしてもし、私だけ生き残ってしまったら、どうして、私だけ死ななかったのだろうか、そんなことばかり考え、悲しんでいるにちがいません。もし、自分の親などを戦争でなくしてしまったら…。そんなことを考えると恐ろしくなります。

戦争は、人を殺したくなくても、国の命令によって、銃やぼくだんで殺しあわなければならなかったり、家族がバラバラになったりしてしまいます。私は、戦争は、絶対におきてほしくありません。大切な命を戦争のためになくすのは、いいことだとは、思いません。

最近のニュースなどでは、簡単に人を殺してしまったり、自殺してしまう人がたくさんいます。でも、命は大切にしなければいけないものだと思います。

私は、もっとよく国どうしが理解し合えるように、話し合いを深めていけば、戦争は、起こらずにすんで、たくさんの人を失うこともなかったのではないかと思います。

私は、戦争を知りません。でも、知らないからいいのではありません。戦争のことを知っている人は、私のひいおじいちゃんをふくめるお年寄りの人たちです。しばらくしたら日本には、戦争を体験した人が1人もいなくなってしまうと思います。だから、私たちがいま、戦争について、もっとよく知って、戦争の悲さんさを忘れないようにしておくべきだと思うのです。

今もアメリカとイラクの間で戦争がつづいています。この2つの国だけの問題ではなく世界の国の問題だと思います。できるだけ多くの人が戦争の悲さんさを知り、おたがいを理解し助けあう世の中にしていけるといいと思います。

人は、悲しみも越えて強くなる。でも、戦争は…

我孫子第三小学校6年 岡田 萌果

《早春》初めの場面は、すごくあたたかい感じがしました。ノリオも柳の芽もいっしょに大きくなっていく感じがしてすごく暖かかったです。ノリオと母ちゃんのごくごく普通の生活がすごく幸せに感じられるなあと思いました。ノリオは、体全体で春を感じていてすごいなあ、この幸せがずっと続くといいなあと思いました。

《秋》ノリオの父ちゃんが戦争に行ってしまう時、ノリオは、まだ小さいから真っ白いのぼりの意味も三角旗の意味もわからずにお祭りみたいと思うことしかできないなんてすごくかわいそうでした。父ちゃんが、足をさすっているのもノリオには父ちゃんのやさしさと感じられたと思いました。ノリオは、父ちゃんが帰ってくると思っているのに父ちゃんは行ってしまってすごくかわいそうでした。そこで、母ちゃんが、泣かなかったのがすごいと思いました。本当は、すごく悲しい。でも、泣くといけないから、がまんしたのです。赤とんぼがすいすいと飛んでいったのもノリオには、赤とんぼがいるだけで、父ちゃんも赤とんぼのように行ってしまったことがわかっていなくて、本当にかわいそうでした。

《おぼんの夜》母ちゃんが死んだという文や、じいちゃんが泣いているという文は、一つもなかったけれど、文の表現でその事実がわかります。じいちゃんは、年をとって、ノリオは、まだ幼くて、2人を残して原爆のために母ちゃんは、死んでしまいました。じいちゃんもノリオもすごくかわいそうでした。でも、母ちゃんもそんな2人を残して死ぬのは、すごくくやしかったと思います。母ちゃんは、死んでしまったけど、川に入ってこ

わがるノリオを助けてあげたように母ちゃんは、ノリオを見守り続けていくと思います。ノリオが、柳の芽といっしょに大きくなったことやノリオに母ちゃんがお仕置きする、そういう幸せな日がずっと続けばよかったなあと思いました。

私は、『川とノリオ』を読んで、人は、つらいことだってあるけど、それを乗り越えて強くなっていくことができるんだと思いました。ノリオだって小さいころに母ちゃんも父ちゃんも死んでしまってそれがわかったときは、すごく悲しかったと思います。でも、その悲しみを乗り越えてノリオは、立派に成長していきます。私は、大変なことがあってもその事から逃げちゃいけないんだと思います。どんなに悲しくてもその事実を受け入れたノリオの強さを感じます。これから、楽しいこともたくさんあると思うけれど、つらいことだってあるでしょう。でも、私は、一日一日を一生懸命大切に生きていきたいと思います。

私は、戦争で死んでしまった人は、死にたかった人は一人もいないのに命を奪われたのだと思います。今、死にたいという人がいるけれど私は、そんなことを全く思いません。戦争は、人の命も奪い、たくさんの人の幸せな生活も奪い、得るものは悲しみ……。私は、戦争なんて起こる必要は全くないと思います。戦争は、終わっても自分の大切な人をなくした悲しみは、なくなるのに。

戦争なんて、なんで起こったのだろう。戦争が起こったことは、言葉では言い表せないほどの悲しいことだと思いました。

いぬいとみこ作『川とノリオ』を学習して

祖母の話を聞いて

我孫子第四小学校 6年 荒川 潤

ぼくは、祖母といっしょに暮らしている。祖母はお料理が得意で、大好物のてんぷらや、フライを作ってくれる。時々しかられるけど、とっても仲良しだ。ある晩、終戦60周年のテレビを見てみると、祖母が子供だった頃の戦争の話を、語り始めた。

祖母は、昭和14年に、東京都大田区入荒井第二小学校に入学した。集団疎開のため、昭和19年9月1日から、熱海に移り住んだ。3月10日、卒業式のために東京へ帰ろうと、熱海の駅まで行ったけれど、汽車が来ないので、いつ来るかと24時間待っていた。東京の方を見ると、空が不気味に真っ赤に燃えている。それが、東京大空襲だったと言う。

祖母が女学校に入学して5日目の、4月15日の夜八時に、川崎の工業地帯をねらったアメリカの爆撃機（B29）が大森にも攻めてきた。最初にパラパラと照明弾が落ちて、きつ

ね火のように燃えた後、焼夷弾が落ちてきて家々を燃やしていった。祖母は自分の家が燃えて行くのを、ただ、ぼう然と見ていた。命だけは助かったのだと。それから、火に追われて走った。細い川と燃えている家々の間の道を、ぬらした防空頭巾をかぶって逃げ、どぶの水を何度も頭巾にかけてもらった。朝まで約8キロメートルの道を逃げ続けたそうだ。ぼくと同じ年齢の祖母がこんな恐ろしい体験をしたのかと思うと想像を絶する。

ある日、祖母の家付近に、アメリカの飛行機がつい落した。そのとき、町の人達がたくさん取り囲んで、アメリカ兵をふくろだだきにして、殺してしまったそうだ。ぼくは、こんなことは、恐くていやだ。戦争になると、いやでも人を殺さなきゃいけなくなる。その反対に、いつ殺されるかわからないと、毎日ビクビクしながら生活するのものがまんができない。

母は言う。戦争しなくてはならないとみんなが思うようになるのは怖い。そしてこうも言う。戦争の前から自由に意見が言えなかった。みんなが一つの意見と言うのはおかしい。円柱を上から見れば丸、横から見れば長方形、というように、一つのことでもみかたによってちがうのだから、色々な意見を聞いて自分自身の考え方をしっかり持てる様人になってほしいと。

ぼくは難しいことはよくわからないけれど、人殺しだけはしたくない。仲の良い人達がむざんに殺されるのはいやだ。知らない人、外国の人、友達や先生親せきや子ども、赤ちゃんや老人。自分に関係の無い人でも、殺されていく戦争は絶対にやめてほしいと思う。

ちがう考えの人も、ちがうはだの人も、ちがう服を着る人も、ちがう土地で生まれた人も、ちがう言葉で話す人も、ちがう物を食べる人も、ちがうお祭りをする人も、ちがう性格の人も、ちがう神様を信じる人も、ちがうことをするのがすきな人も、みんな仲良くして、戦争の無い平和な地球でいてほしいなあ。

真剣な顔で見つめる少年

湖北小学校6年 澤口 未希

社会科の学習で先生に一枚の写真をわたされ、その写真について考える事になりました。一枚の写真には、まだ小さい少年が幼子をおんぶし、真剣な顔で前をずっと見ている姿が写っていました。先生からは写真を配られた時、「長崎」と「1945年」というヒントだけいただきました。

私はまず、どうして少年が幼子をおんぶしているのか、疑問に思いました。でも、一番

疑問に思ったことは、少年の真剣な顔で見つめている先には何があるのだろうかということ、おんぶされている幼子は寝ているのだろうかということでした。そこで、私は、この疑問から考えてみました。私は、少年の家族や親しかった人が原爆で亡くなってしまい、少年と幼子の二人だけになってしまったんだろうと思いました。

次に、そのように気付いたことや疑問に思ったことなどの意見をみんなで出し合いました。みんなの発表では、「少年におんぶされている幼子はもう亡くなってしまっている。」「戦争中だから食料も少なく、幼子は弱ってしまっている。」など、色々な意見がでました。私も写真を見て、幼子はまだ小さいし、戦争で食料も少ないから弱っているんだろう、と思いました。

発表が終わり、先生がもう一枚の紙を配りました。その紙には、この写真を撮ったアメリカ軍のジョー・オダネルさんの話がかかれていました。その紙を先生が読んでくださいました。私が疑問に思っていた「少年が真剣に見ていた先」には、焼き場があるということがわかりました。ということは、もしかして幼子はもうすでに亡くなっているのかと思い、とても気になりました。それで、先生が読んでいる所によく目を通し、聞いていました。写真を見ているだけでは寝ているのか、亡くなっているのか分からなかったけれど、やはり、幼子は亡くなっていました。少年は、かたい表情で、白いマスクをした男たちに幼子をわたしました。そして、焼き場の中にそのまま入れ、幼子の肉体が火に溶ける音やまばゆいほどの炎がさっとまいたったそうです。今では考えられないような火そうのし方だなと思いました。この様な光景を直接見ていた少年はとても悲しく、言葉に出せない位悔しかったと思います。

そして、夕日のような炎が静まると、少年はくるりときびすを返しぼう然としたまま焼き場を去ったということでした。

私はこの話を聞き、少年は大事な家族をなくし、とてもかわいそうだなと思いました。戦争中は少年の他にもこのようなことになってしまった人がいると思うと悲しくてなりません。この学習を通して、戦争という、みんなが傷つき、悲しい思いをしてしまう様なことは決してしてはいけない。戦争だけじゃなく、言葉の暴力やケンカなども、あってはならないと改めて思いました。

世界の人々と戦争

布佐小学校6年 田崎 有佳

私は学校の授業をきっかけにして祖母から戦争について話を聞きました。

祖母から聞く生活は今の私には考えられないことばかりです。戦争中は食料や衣服が配給制のため、満足な食事ができず、服も新しい物などは手に入らなかったそうです。学校では、空しゅうが激しくなって集団疎開で家族と離れて生活しなければならないこと、体育の授業でなぎなたの練習をすること、空しゅう警報のたびに防空ごうに入らなければならないこと、戦争が終わるまで何一つぜいたくできなかったことなども聞きました。私の住んでいるこの町が爆弾で壊され、逃げまどい助けを叫ぶ声が聞こえる……。こんなことを考えただけでも悲しくなりました。

今年で終戦から60年たちますが、今でも戦争を体験した人たちの心には戦争の悲しく悔しい深い傷が残されています。私の祖母もその一人なのです。

なぜ戦争を行うのか。どんな気持ちで戦うのか。いろいろな疑問が浮かんできました。戦争のきっかけは、異なる民族や宗教の間で恨みや憎しみから始まるのだと考えました。日本でも、中国や韓国の人々が植民地支配が終わっている今でも、様々な問題についてデモを起しています。しかし、戦争を始めることについて理解することはできません。理由が持てたとしても戦争という残酷なことをしているのに変わりはないからです。戦争は国と国との関わりや、人の幸せな生活もうばってしまうし、その戦争が終わってからも深い傷あとを残し、新たな憎しみや恨みを生むのです。

戦争のない平和な世界を作るためには、今の私たちはどうすればいいのでしょうか。

貧しい国の援助のために手助けをしたり募金を行っている団体は数多くあり少しずつ回復しているものの、また内戦や戦争が起こってしまうのならば意味がありません。日本は憲法によって二度と戦争をしないことを決めています。他の国すべてが戦争をしないとちかうことは不可能ではないかと思います。

私は、戦後60年たった今こそ日本から戦争をなくす運動を世界中に広めていく機会にして欲しいです。これからの社会は憎しみや恨みをを持たず、世界の様々な民族や宗教の人たちが協力し、平和な国を作っていこうとする心、鉄砲や爆弾を捨て軍隊を進めることを止めようとする心が大切です。みんな分かっているはず。戦争をして何の利益もないし、苦しい生活をする人が増えてしまうだけだということ。戦争をして気持ちいい人なんていないのです。

私は授業をきっかけに祖母から体験談を聞き、これからの未来は私たちが作りあげてい

くのだから、戦争のない平和な世界を作っていく必要があると感じました。少しでも早く、戦争のない平和な世の中、人々が協力しあえる世の中が迎えられることを願い続けます。

原爆のおそろしさ

湖北台西小学校6年 古川 達也

「指先が燃えていた。皮フがだらんとたれてぼとりと下に落ちていた。」

「爆発した時手で顔をかくしたら、手の骨が見えた。」

これは、広島で原爆が爆発した所に近くにいた人の話です。ぼくは、その人の話を聞いて、ものすごくこわいことがすぐにわかりました。また、手で顔をかくしたら、手の骨が見えるなんて、すごく強い光りで爆発したんだと思いました。

もし、ぼくたちの街に原爆が落ちたらどうなるんだろう。と考えると、すごくこわくなります。

広島で原爆のビデオの映像は、こわくておそろしいものばかりでした。

原爆で家がたおれて、ぼくだけ生き残っていて、他の人はみんなおしつぶされた状態だったら、ぜったいに家族みんなを助けてからにげる。そしてみんなを助かりたい。なぜなら『家族』だから。

けれども、もし家族が死んでしまったら、安全なところへおいて、ひなんして、生きのびたい。

もし、自分が死んだら、家族だけでも助かってほしい。

なんで戦争をするんだろう。

なんで戦争があるんだろう。

ぼくはふとこんなことを思った。

自分たちの欲望のために、土地や資源をなんでとり合いするんだろう。なんで人を殺してもこんなことをするんだろう。ぼくは、すごく不思議に思った。今からでも戦争の時代に行って、戦争をやめさせたい。また、戦争をしている国があったら、戦争をやめるように言いたい。そして、少しでも早く平和な国にしたい。

「戦争に行け。」

と命令する人は、自分が戦争に行けばどうだろう。自分が行けば、戦争の怖さがわかって、戦争をやめたい気持ちになると思う。

やられたからやりかえす考えの国は、けんかみたいで、だれかが止めないと終わりがな

い。こんなことをしていたら、人がどれだけ死ぬかわからない。そして家族の苦しみがくり返される。

でも、最初に戦争をはじめる国は、やられたらやり返す国より、悪いと思う。最初にこうげきしなければ戦争はおきない。けれど、戦争をやりたいと言っている国は、世界中の人々でやめさせるように言っていけばいいと思う。

核兵器を処分しないで、もっている国の命令できる立場にある人は、一度広島、長崎に来て、平和資料館を見学したり、被爆者の人たちの話を聞いたらいいいと思う。

今の日本は、いろいろ問題はあるけれど、戦争で人が次々に死ぬようなことはおきていない。だから、もう戦争はしてほしくない。

戦争学習を終えて

高野山小学校6年 高木 桃子

この勉強全体の始めは、夏休みから。私は、特に題材を決めたわけではなく、テレビの戦争についてのことや、8月6日から8月15日などの新聞を読んだりして、調べました。そのほとんどは、広島や長崎の原子ばくだんなどについての太平洋戦争のことでした。今年戦後60周年ということで、昨年より、新聞もテレビも多かったんじゃないかな、と思います。私が見たテレビでは、原ばくを落とした人と、落とされた人が話し合っていました。落とした人は、前の日に、原ばくドームなどにも行ったそうでした。でも原ばくを落とした事についてどうおもいますか？のような事を聞くと、「私達も被害者だ！」と、私達だって、ヒドイめにあったんだから、同じです。と言っていました。たしかに、戦争なんだから被害にあうのはわかるけど、原ばくを落とした事について、そういうふうを考えてた。ということを知って、すごく、ショックでした。「ヒドイことをした。」と思うアメリカ人も、もちろんいると思うけど、落とした人が、そういうんだったら、アメリカのほとんどの人もそう思うんだな、と思いました。もっときちっとしてほしい。でも日本も、ヒドイことをした。アメリカ以外にも、中国や朝鮮にもヒドイことをした。きっとみんなそう思ってることをわすれちゃいけない。わすれられないんだと思う。

二学期、グループごとに、戦争の国ごとに、国民や、軍人の気持ちを劇で発表することになり、私のグループでは、「戦争中の朝鮮人民の気持ちについて」をテーマに劇をつくることになりました。発表するのは、朝鮮で起こったことだけでなく、朝鮮の人たちの「気持ち」だったので、とても大変でした。まず、資料集めからでした。日中戦争～太平洋

争まででした。図書館などに行っても、そのことについての話はほとんどありませんでした。だから、教科書にのっていたことを三つにわけて発表しました。

それは、①なんで、名前まで変えるのか。

②強制的に連れて行かれた人々の家族の気持ち

③なんで、日本の戦争に協力しなければいけないのか。

についてでした。

せりふを作るのも大変で、資料をもとにほとんど、予想して考えました。発表して、少し時間が短かったけれど、朝鮮人民の気持ちが伝わってくれていたら、うれしいです。戦争の学習をして、こわさや、人民の気持ちが分かりました。もしまた、戦争が起こるとしたら考えるだけですごくこわいです。私だったら生きていくだけでも大変だと思う。もう、こんなことは絶対に起こらないでほしいです。

「川とノリオ」を学習して

根戸小学校6年 梅田 哲也

ぼくは「川とノリオ」の学習をして、戦争のこわさやひどさを感じました。この話の中でノリオは、まだ小学生のうちに、両親をなくしてしまいました。ノリオの両親は罪もない人なのに戦地へつれていかれたり、ぼくだんを落とされたりしてなくなってしまい、戦争は、国の利益のためだけに行われ、何の罪もないたくさんの人々をまきこんでいてとてもひどいと思いました。

もし、ぼくがノリオだったらどうでしょうか。なにも知らないうちから父は戦地に行ってしまうのです。ぼくだったらこの時点でとても暗く落ち込んでしまうと思います。また、2才の時に母が亡くなってしまったら、ノリオのように前向きになれるでしょうか。ぼくだったらそうはなれないと思います。

この「川とノリオ」の学習を通してぼくは、戦争とはとてもおろかなことだと思いました。それは、国の利益のためと始めたことがけっきょくは、国土がめっちゃめっちゃになったり、なんの罪もない人々をまきこんだりと、いいことなんて一つもないと思うからです。また戦争が起こるといのはこどものけんかと同じだと思いました。ただ争いのきぼがちがうだけで、自分と相手のほしいものとりあいになって争いになるというような点は同じだと思います。だから、日ごろから、相手のことをよく考える、これからやろうと思っていることを実際にやったらどうなるかということを考えるということができるようにな

らなければいけないと思いました。

またこれから、ずっと平和であるために、それぞれの国が、自国の利益という考えにとられず、ゆずり合いや助け合いながら政治を行っていくということが重要だと思いました。また武器や武力を持たないということも大切だと思います。人間は、自分が力を持っているとどうしてもそれを使いたくなるからです。これは自分が何かいいものを持っていると見せびらかしたくなるのと同じことだと思います。だから武器を捨て、他国のこともしっかりと考えるということが平和を保つために大切なことだと思います。

世界の子供たちに平和を

湖北台東小学校6年 星野 友香

夏の初めに、『地球のステージ』という世界平和記念のイベントがあると聞きました。私は、世界のいろいろな国々に興味があったので、行ってみることにしました。

この『地球のステージ』では、桑山紀彦さんというお医者さんが、世界の国々の医療救援活動をした時に現地で出会った子供たちの様子を、音楽や映像で紹介してくれました。その中でも心に残ったことが二つあります。

一つ目は、ゴミ山の中でも、がんばって生きている国の子供たちのことです。その場所は、ごみがいっぱい積んであって、子供たちは、そのごみの中で、何かを探し歩いています。この国の子供たちは、おもちゃなんて買うお金がないので、ゴミ山の中から、材料を拾って自分でおもちゃを作っているのです。私は、ほしいおもちゃをすぐ買うことができるのに、かわいそうだなあと思いました。でも、この国の子供たちは、ごみで作ったおもちゃでうれしそうに遊んでいたのが忘れられません。

二つ目は、海のとていぼうみたいなところの穴に住んでいる子供たちのことです。桑山さんが、そこ住んでいる女の子に風船をふくらませてあげると、すごく喜んでいました。その女の子は、何人かの友達を呼んできたので、桑山さんは、その子たちにも風船をあげました。みんな喜んでいました。日本では、風船なんてどこにでもあります。けれども、その子供たちは、ちゃんとした家もないし、貧しい暮らしをしているので、風船を見たことが、今までなかったのかもしれない。そんなにめずらしい風船を自分だけで一人じめしないで、この喜びを友達にも分けてあげようとするなんて、この女の子は、貧しくても心の優しい人だなと思いました。

私たちは、買いたい物は、すぐには買えるけど、世界には、何も買えない子供たちがたく

さんいることがわかりました。そして、日本の今の時代に生まれている私たちは、なんて幸せなんだと感じました。戦争もしていないし、子供は、みんな学校に行けます。食べ物も豊富です。余った物は、すぐ捨ててしまいます。住む家もあります。

でも、世界には、まだまだ大変な国があります。私は、そういう国の様子をニュースや社会の勉強でよく理解し、自分が今してあげられることは、ないかを考えていきたいです。

そして、少しでもその国の力になれる活動ができればいいなと思っています。そのためには、最初の一步として、むだな物は買わないようにしたいです。むだをなくすことで、資源の節約にもなるし、余ったお金などをボランティア活動にいかしていきたいです。

戦争はこわい

新木小学校4年 梶井 あゆか

わたしは、新木小のお母さん方や友達といっしょに「広島の日」というろう読げきに参加しました。なぜ広島の日に出えんしたのかというと、テレビで戦争のことや、人をころすおそろしいげんばくのドラマや本当にあった戦争のえいぞうを見たからです。だから、今度は自分から戦争とは何なのか、げんばくは、どんなにこわいものなのか、ということをもみんなに伝えたいと思ったのです。

毎週、木曜日と金曜日に、学校が終わってから夜6時までずっと練習をしました。初めは、本の内ようは全部よんでいなかったから、ぜんぜん悲しくもなんとも思いませんでした。

でも、毎日練習して内ようがわかってくると、なんだか悲しくなってきました。それから、どんどん悲しくなって、むねが苦しくなってきました。なかでも一番かわいそうだなと思ったのが「姉と弟がいっしょに学校の帰りに手をつないで歩いていると空に大きな光が「ピカッ」と光り、一しゅんで姉と弟をつないでいた手はなれ、弟だけがぼく風でとばされてどこかへ行ってしまった。」という話です。姉が「きつとがれきの間にはさまれ、母と父をよびながら焼け死んでいったのだろう。」と弟を思うところが、とてもかわいそうでした。

発表の前日、リハーサルをやりました。その日は学校からいったん家に帰って練習に行き、最後のリハーサルを終えました。

発表当日、わたしはドキドキしながら自分の番をまわりました。そして心をこめてろう読しました。その時わたしは緊張感とみんなに戦争のことをうまく伝えられるかなと思いな

がらろう読しました。そしてぶじに本ばんが終わりました。

わたしはぜったい、一生、戦争はやってほしくないです。すべての国がみんなでなかよくしてもらいたいです。

そしてまた機会があったらこのまえのろう読げきよりもっと心をこめて読みたいです。

水曜日のロングの話

新木小学校6年 佐藤 徳保

7月13日のロング昼休みに、昔の戦争の話を体育館で教えてもらいました。昔の人は、皆原爆に耐え、そしてこの時代、平成になったのです。

原爆で死んだ人もいて、やけどや白骨だけになった人などもいました。それと比べると、今は少し平和です。でも、完ぺきに平和とはいえないのです。イラクに原爆などを落とししていたのです。今では防災頭巾と呼ばれている物は、昔は防空頭巾と呼ばれていました。

日本は、アメリカなどの外国と戦争をし、けっか、日本は負けてしまいました。しかし戦争は、大人が戦うもので、戦いにまきこまれた子供達は、どうするのかを外国に聞いてみたいです。

そして最後に、「いやなことは、ぜったいいやだと言わなくてはいけません。」と大人の人がいっていました。

ぼくは、この戦争にまきこまれた子供や人々がかわいそうに思います。

朗読劇を聞いて

新木小学校6年 篠崎 仁美

ろうどくげきをきいて、戦争がどれだけおそろしいかわかったような気がする。

私は、1945年8月6日午前8時15分に、ばくだんがおとされたことを少ししっていた。はだしのゲンをみたり、おじいちゃんにきいたりしていたからだ。

はだしのゲンをみたときは、ちょっとこわいなと思っていたけど、今日はちがう。少しじゃなくて、すんごくこわかった。特に写真。大やけどをしている人。ばくだんのオレンジの火、けむりがやきついた目。ばくだんでしんだ人のいこつがずらりとならんでいた写真。なにもかもがこわかった。

きっと、戦争でひどい目にあった人は、きつとこう思っているんじゃないかな。

どうして私たちがひどい目にあわなくちゃならないの。どうしてぼくたちはくるしんでいるの。といろんな疑問をもつ人がいたかもしれない。

でも私は、戦争を体験していないからわからないけど、今日あったこと、けっしてわすれないでいたい。

広島のを聞いて

新木小学校6年 中田 千尋

昔、広島にげんぱくがおちた。それは、おそろしい。だって、人がしまいにはしんでしまうんだから。本当にこわい。

今日のその日、空はまっか。もう、観ているだけでもこわい。でも、にげている人はぼうくうずきんしかかぶっていない。このままでは、しんでしまうじゃないか。もうみんな、にげることでせいいっぱいでした。

今は平和ですけど、私たちが生きてた時、戦争がおこったらびっくりです。まず、なにをすればいいのかわからないからです。

でも、今はちがいます。平和です。昔は、どうしてこんなことがおこってしまったのか不思議です。かわいそうです。

そして、町？は血だらけでした。いたいが町にたおれていてびっくりです。今日は、さいあくな日でした。

広島のを聞いて

新木小学校6年 田中 あゆこ

私は、広島のを聞いて、とても悲しくなりました。今は、平和と言えないけど、学校で勉強が出来たり、幸せな暮らしをしています。

でも、1945年8月6日は、今とは比べられないくらい悲しみにあふれていたと思います。ふつうに生活していたのに、一しゅんで変わってしまい、なにもかもが消えてしまった。それを私が体験していたら、ぜったいに思い出したくないと思います。

今は、お父さんやお母さんが仕事をしているけど、昔は、12才から仕事をしていたそう

です。私は、まだ子供なのに働くなんで、とてもいやです。でも、それにたえていた人は、すごいなと思いました。

原爆くが落ちた時、どんな気持ちだったか。戦争を体験していない私には、とてもわかりません。でも、戦争の事はいつまでも忘れずに、ずっとずっと覚えておきます。

朗読劇を聞いて

新木小学校6年 鈴木 萌菜

その日、体育館でお話し会があった。戦争のことについてだ。私は、そのないようをきいた時、「やだな。こわそうだな。」とっていた。そして話しがはじまった。

1945年 広島の夏

今から60年前、たった60年前に広島に一つのぼくだんがおちた。8時15分だった。約40万人もの人が、いや、もっといるかもしれない。一つのぼくだん、たった一つのぼくだんで何人もの人になくなった。

8月6日、8時15分。山口県と広島県のけいほうが、どうじになりひびく。そして、3021人もの人になくなる。ある学校では、全部で672人もの子どもがいき火の中でした。25年たっても、そのあとはいろんな所にのこっている。

そして今、もうすぐ60年がたつ。私は、戦争をじっさい見たことがない。でも、このことは、一生わすれてはいけないとおもう。

この話をきき、ものすごくむねがくるしくなつた。戦争が、いまこの場でおこつたら。私は、かぞくといっしょにいたい。友だちともいっしょにいたい。ぜつたいに戦争はあつてほしくない。ずっとずっと、そう思っていた。

そして今も、このそうさくノートを書いているときも、ずっとかなしい気もちでかいていました。このノートにかききれないほど、たくさんあつた。

戦争の恐ろしさ

並木小学校6年 大西 早紀

「B29……。」

小声でいった母ちゃんは戦争をこわがっていました。けれど、もっとこわがるノリオの

ために母ちゃんは洗たくの時も、防空ごうの中でもいつもいっしょにいて、ノリオをささえ続けました。そんな母ちゃんはノリオのために、「ハイキュウ」に呼ばれてこわい広島へノリオとじいちゃんをおいて、行ってしまいました。その時私がノリオの母ちゃんだったら、ノリオのことは大切だけど、広島へ行ったら自分が死んでしまうかもしれないと思って広島へは行かなかったと思います。けれど母ちゃんはノリオのために広島へ行ったのです。でも何も知らないノリオは母ちゃんがお米一しょうとかえてきた黒いゴムぐつを川へ流してしまったのです。母ちゃんが来てくれると思って。ノリオは母ちゃんがない日々がとても悲しく、さみしかったと思います。私ならいつも泣いていたと思います。

ノリオの大切な父ちゃんと母ちゃんをうばった戦争はとてもおそろしく、いやなものです。私がこのころに生まれていたら、暗いやみの世界の中に一人だけ…。とっていたでしょう。今はとても平和だけど、ノリオのように小さな子供が戦争にまきこまれていたと思うと、とても悲しいです。

この本は戦争の恐ろしさを知らない私にいろいろなことを教えてくれました。もう二度と戦争はおきてほしくないです。

たばこのけむりのようなB29の白い筋は、戦争が始まる合図。それを見た母ちゃんとノリオは空襲のことを思ったと同時に、父ちゃんのことをとても心配したと思います。私がノリオだったら、空襲のことより、大事な父ちゃんのことを思い出すから。大事な家族がいなくなるなんて私はとてもじゃないけど考えられません。もし、私の両親がいなくなったら、未来のことを考えることができなくなるでしょう。でも私は兄がいるので少し前のことを考えるかもしれませんが、ノリオは一人っ子なので私以上に悲しんだと思います。母ちゃんと父ちゃん、おばあちゃん、おじいちゃん、ノリオの5人家族でその内の3人が死んでしまいました。そして今、おじいちゃんとノリオの二人でしかも、おじいちゃんはまだ髪も白くぼしゃぼしゃになってきて、年なのでもう死んでしまうかもしれません。そうしたら、ノリオ一人になってしまいます。私が一人だったら友達の家に行こうと思って走り出します。でも今は戦争中なので外へ行くのも危なくて行けません。そんなとき、ノリオだったらどうするのだろう…。私は全く考えがつかいません。やはり、暗いやみの世界の中に一人だけになる運命なんだろうか？本当にかわいそうなノリオを導き出した戦争は、今ないので、この時代に生まれて、私は本当によかったです。

苦しい生活をしたノリオのためにも今、私は命を大切に生きていきたいです。

戦争中の人々の苦しさについて

並木小学校6年 池田 愛

どうして戦争なんかしたのだろう。私は、戦争中の暮らしについて調べている時にそう思いました。戦争をして良い事もあったかもしれない。しかし、大変な事だってたくさんあったはずだ。そう考えたので、戦争中の生活や人々の苦しみを祖父に聞いてみました。祖父が小学校1年生の時、太平洋戦争が始まったそうです。始めは、戦争に日本が勝っていて、物や食べ物があったので、暮らしは良かったそうです。ところが、祖父が小学校2年生の頃から、日本は負けてきて、4年生の時には、年中、空に飛行機が飛んでいたそうです。私は、毎日怖い思いをしていたのだろうなと思いました。飛行機は何百機もいて、虫のようにたくさん飛んでいたそうです。祖父は、小学校に通っていたのですが、勉強をやってもらえないくらい大変で、にげてばかりいたそうです。私は、にげるのを毎日くりかえすのは、大変なことだと思いました。そのころは、玉子が1年に1個か2個くらいしか食べられなかったそうで、その玉子1個を家族5人か6人くらいで、ごはんの上にかけて食べていたそうです。牛乳も1年に200ミリリットルのびんを1本しかもらえないそうで、その牛乳を水でうすめて飲んでいました。私は、戦争中の人々の生活の事を聞いて、人々が爆弾や食べ物で苦しめられてきた事がよく分かり、戦争中の人々の気持ちが少し分かったような気がしました。日本は、たくさんの人々が苦しめられていてかわいそうだけど、戦争で勝ったアメリカも、人々が苦しめられたのだろうなあと思いました。

祖父が小学校5年生になって、太平洋戦争が終わりました。残念ながらも日本は負けてしまい、負けた日から10日間の間にアメリカ軍が来て、せんりょうしてしまったそうです。祖父たちは、アメリカの人に、「ギブミー」と言って、おかしや文ぼう具をもらったそうです。私は、アメリカ人に「ギブミー」と言うと、おかしや文ぼう具をくれたりするのはすごいなあと思いました。でも、どうして「ギブミー」と言うともらえるのか、不思議に思いました。私はきっと、アメリカは日本人に「アメリカはいい国だ。アメリカ人はいい人だ。」と思ってもらいたかったのだろうなと思いました。このことを父に聞いたら、アメリカはこのようなことをしたので、今イラクで起こっている自爆テロみたいなことが起こらなかったんだと教えてくれました。

今回戦争の話聞いて、日本人もアメリカ人も苦しい思いをして、ひどい目にあったので、戦争なんてやらなければいいのになと思いました。太平洋戦争から60年がたってもその間日本では、戦争がなくて平和だったので、これからはずっと、戦争がない時代になってほしいなあと思いました。そのためには、今回祖父に聞いた話をたくさんの人に伝え

ていかなければならないと思いました。

戦争…「川とノリオ」を学習して

並木小学校6年 中島 諒子

この話はノリオという少年が生きた戦争時代の話です。この話を読んで戦争がどれだけおそろしく、悲しいものか知りました。ノリオはまだ5才くらいで一番お父さんやお母さんといっしょにいたい時期だから、こんな時に幼い子の両親をうばった戦争がとても許せないと思います。

戦争中には、両親をなくし、親せきにあずけられてくらすことになった子もいるそうです。親せきの家の人には子供が来たため、ごはんが少なくなってしまう。ごはんがカボチャのにつけだけとか、植物のツルをみそしるに入れて食べていたそうです。そのため、体重はげき減して、子供の体重は6年生の子でも20キログラムぐらいになってしまいました。子供が栄養不足で死んでしまうこともありました。1945年に原爆が落とされたとき、何万人という人々が死亡したといえます。「カッ」という光のようなものが人をおそい、なにもかもがくろこげだったそうです。また、ゴムぐつ、砂糖などが不足していて、かっもらった人を見つけるとぬすむ人もいたそうです。子供が子供のものをぬすんでしまうほど物が不足していたころがあったのです。母ちゃんがのりおのためにお米一しょうと黒いゴムぐつをかえてきたという場面で、お米一しょうは、1.5キログラムものお米なのにゴムぐつとかえてきたということは、お母さんはノリオのために、よっぽどゴムぐつをはかせたかったんだなあと思いました。まだ幼いノリオが川の中に一日中お母さんが帰ってくることを、ただ、ただ待っているという場面が物語で一番心に残りました。なぜかという、なにも知らないノリオがお母さんだけを待っている、という所がじんときたからです。

ノリオがガラスのかけらをポンと川に投げた時、ノリオはきっと、今までつらい気持ちを捨て、未来に向かってがんばっていこうと決意したのだと思いました。その場面を読んで私は、これからがんばってほしいと思いました。これから先、戦争は絶対起こしてはいけないと思います。

六十年前の悲劇と市民ミュージカルへの参加

布佐南小学校6年 内形 優樹

私達は12月7日に、飯牟礼さんを学校に招いて戦争についてお話をして頂いた。飯牟礼さんは、小学校4年生の頃に戦争を体験した事や、戦後の満州の悲劇を語って下さった。

太平洋戦争中は、お米やタバコ、衣料品も配給制になり、英語の野球用語、使用着も禁止。昭和19年には「神風特攻隊」がつくられ、18、19歳の若者が、アメリカの戦艦に体当たりして死んでいった。この神風特攻隊の若者たちはどんな思いで死んでいったのだろうか。片道の燃料を積み、自爆するなんて考えただけでも怖い。昭和20年3月、「東京大空襲」。B29が東京を襲い、一晩で8万人から9万人の人が亡くなったという。空から爆弾が雨のように降ってきて、家を焼かれ、大勢の人が傷付き死んでいった。そんな逃げ場のない空襲はとても怖い。8月6日、広島に原爆が落とされた。そして、8月9日には長崎にも原爆が落とされた。人々が普通に生活をしていたのに、いきなり爆弾を落とされ、一瞬にして広島では約20数万人の命が亡くなり、長崎では約15万人の命が亡くなったという。広島と長崎には原爆の悲惨さを後世の人たちに伝えようと、原爆ドームや平和の像がある。私は行ったことがないけれど、「今では観光名所のように扱われ、ドームの目の前でピースをして写真を撮っている人がいる」とテレビで放送していた。何十万人という人が亡くなり、再び原爆を使用してはならないという大勢の人々の強い思いがこめられたものに、そのような行動をとってはならないと思う。今でも苦しんでいる多くの人々のことを考えると、とてもかわいそうだ。原爆を投下した人は、どんな気持ちで投下したのかが知りたい。昭和20年（1945年）8月15日終戦

飯牟礼さんの話や頂いた本を読んでいると、戦後のとても辛い日々が目に見えてくる。満州でのとても厳しい冬、戦争に負けた日本人がしていた仕事はすべて中国人の手に渡り、権力を持った人々はみんな殺されてしまった。とても辛く厳しい生活を送っていたのだと思うと、今の私達はどんなに幸せなのだろう。満州にいた日本人は、ソ連と現地人の双方の攻撃を受け多くの方が亡くなったという。「命からがら奉天に逃げてきた人達も、望郷の念むなしく飢えと寒さの中で次々と死んで行った。丸太のようにコチコチに凍った死体を郊外の野原に埋められ、『せめてこの子だけでも生きていてほしい』と中国人に我が子を受け取る親も沢山いました。」という文章があり、それを読んだ時私は、子供を売るなんてとても辛いことだろうと涙がこぼれてしまった。

戦争中は何もかもが辛い事だらけで、本には「死の道のほうが正しいのではないか」と言うようなことが記されていた。戦争で亡くなった人々は、自分達の思いとともに生き

ほしいと思っていた？のではないかと思う。戦争のこと、平和のことをいつまでも語り続けて行くことが大切であると強く感じた。

私はこの夏、我孫子市民ミュージカル「バレンタイン・ドリーム」に参加した。1月にオーディションを受け、合格しての参加だ。

この「バレンタイン・ドリーム」は、愛とは何か、平和とは何かを語りかけ、争いの心を捨てることの大切さを訴えるもので、《戦後60周年記念平和事業》の一つでもあった。このミュージカルに出演する事で、大切な何かを学べるのではないかと感じていた。

3月からの稽古で、自分の声に自信が出て来た頃に役の発表となった。私は正統派の好青年、レモーナ卿役で、婚約者マリエットへの想いをソロ3曲で表現する役となった。毎回のダンス、歌稽古はどんどん本格的になり、年齢の違う人達とも仲良くなった。

そんなある日、私達に悲しい出来事が起こった。「げんきフェスタ」というお祭りにPR出演していた時、「ひき逃げ事件」の放送があった。その後、事件にあった人が、「バレンタイン・ドリーム」の出演者の一人だと知り、とてもショックだった。その人は身体が不自由ながら、ミュージカルの練習を誰よりも一生懸命に取り組んできた人だ。みんなが心をつにし、天国まで届くように「レクイエム」を歌った。

本番までの1週間は、毎日ハードな練習だった。8月27日の本番当日、公演5分前に私達ジュニア組は、円陣を組んだ。「泣いても笑ってもこれが最後だ！思いっきりやって来い！」と言われた。「絶対成功させる！」と強く思った。2時間の公演は大成功で幕を閉じた。私達ジュニア組の舞台裏では、みんなが泣いた。30分後、そら組の公演開幕。私達は新しい気持ちで、公演に挑んだ。そら組も大成功し、みんなが感動に包まれた。私は、みんなと共にやりとげた充実感で一杯で、胸が熱くなった。

8月28日最終公演かわ組の開幕。音楽は次々進み、最後の曲「レクイエムの復活」が始まり、「もうフィナーレか」と思いながら静かに舞台に立った。涙が止まらなかった。

2005年夏ミュージカル「バレンタイン・ドリーム」

私はこの夏、命の大切さや争う事の悲しみ、愚かさについて学んだ。命は、お金では買えない一人一人の大切なもの。そして、命が止まってしまえば、自らまた動き出す事は決してない。今回のミュージカルでのハッピーエンドへの展開やゲームの中の世界では、主人公が死んでも、リセットすれば主人公は生き返ることが出来る。でも、現実の世界では、人の人生はたった一度きりだ。私は、一日一日を大切に大切に生きて行きたいと思う。そして、60年前の戦争の悲劇を再び起こしてはならない。戦争をすれば多くの人が命を落とし、多くの人が悲しみに包まれる。誰が戦っても、悲しむのはその人達の家族。そして、被害を受けて行くのは、無抵抗の小さな子供達。「誰かが戦わなければならない」ことにな

るような揉め事などを起こしてはならないと思う。

ずーと、ずーと、いつまでも幸せな日々を送れる事を、世界中の誰もが願っていると思う。

色々な事を学び、考える事が出来た年となり、私にとっての最高の宝物となった。

戦争について

我孫子中学校3年 相田 麻衣

戦後に生まれた私たちは、今何ができるのでしょうか。そして未来のために何をしなくては、いけないのでしょうか。

今までの学習を通して、戦争は日本人だけが苦しんだ訳ではなく、他国の人々もまた同じように苦しんでいたことを知りました。戦時中の日本全体が「戦わざる者は国民にあらず」の精神だったと知り、戦争の悲惨さを痛感しました。人を殺すことが幸福につながるという考え方がどうして生まれてしまったのか、誰が戦争をはじめてしまったのか私は理解ができませんでした。でも、よく考えてみるとそれが戦争の恐ろしさなのだと思います。このことについて調べてみると、1890年には「教育勅語」で国家の命令には絶対に従うよう、教えこまれていたのです。現在の日本の教育では、「戦争は絶対に起こしてはいけないこと」と教えられています。戦争の時代では、「お国のため」に命をすてることこそ立派な生き方だと教えられていたのです。そんな中でも国の指導者で、戦争に命を捨てる覚悟で反対した人もいたそうでとても勇気のある行動だと思います。しかし現実には、そのような人たちは「非国民」とののしられました。戦争の時代に「非国民」とののしられても本来は勇者である人がたくさんいれば、もしかしたら戦争はおさまっていたのかもしれない。

今から60年前、日本では戦争という悲惨な戦いが終わりました。しかし、戦争では今なお、この瞬間にも誰かが誰かに銃を向け、お腹を空かせながら、戦争の夜明けを待っている人がいます。私は、戦後の安定した時代に生まれ、死と隣り合わせの戦争を体験したことがもちろんありません。このことこそ、本当に幸せなことだと思います。ですが、戦後の今を迎えるまでには、たくさんの人々の命が犠牲となりました。そして、戦後に生まれた私たちができること、やらなくてははいけないこととは、戦争とは何かを知ることだと私は強く感じました。この頃、戦争を語り伝えようとたくさんの方が本を執筆し、映像に想いを託して下さっています。そのような本や映像を通して戦争について知らなく

てはいけないことを学ばなくてははいけないと思います。今世界のどこかで起きている戦争が一日でも早く終わるにはどうすればよいのか私はよくわかりません。しかし戦争についてももっともっと知っていこうと思います。そして、戦争で犠牲になられた方々の命を無駄にしないで、戦争を忘れずに世界の平和を願っていきたいと思います。

戦争の人権問題

湖北中学校2年 大橋 健太

僕は、戦争はすごく大きな人権問題だと思います。それは戦争だと人の生きる権利すらうばってしまうからです。少し前、テレビを見ていたらアフリカの内戦についての番組をやっていました。一つの国の中で宗教の違いや人種の違いでお互いに憎しみ合い殺し合うなんてとても悲しい事だと思うし、そんな事をして何にもならないと思います。つい最近にあったイラク戦争も民間人が最も被害をうけたと思います。戦争はやっている人々だけでなく周りにいる人々もたくさん傷つけ、命をうばいます。今、平和になったといっても世界のどこかでは戦争をしているし、国と国との戦争が無くても、国の中での戦争も多くおこっています。人権とは人が生まれながらにして持っている平等な権利といっても、戦争で死んでしまえば、なんにもならないと思います。日本は今平和だけれど差別など色々な人権問題がおきています。平和な国ですらたくさんあるのだからそうで無い国はもっとたくさんの人権問題があると思います。戦争で使われる兵器もどんどん強力な物になって今は核兵器も作られているけれど、平気で核兵器を使える国はその被害にあった事が無いからだと思います。その被害をしっている人なら二度とそんな物を使って同じ事をくり返したりしないと思います。第二次世界大戦の時のナチスドイツによるユダヤ人の迫害や、日本の南京大虐殺もその最もひどいものだと思います。人種が違うからといってその命の重みはかわらないと思います。きっと今まで戦争をして死んだ人よりも、関係の無い人で死んだ人の方がとても多いと思うし、その被害にあった人なんか数えられないぐらいいると思います。日本も弥生時代のころから始まりたくさんの戦争をしてきたけれど、やはり関係が無い人で死んだ人はたくさんいたと思います。反発して一揆などがおきているのも当然だと思います。戦争になると、人々の人権なんて法律によって守られていても簡単に忘れられ破られてしまうのは悲しい事だと思いました。色々な人権問題があるけれど、戦争が無くなり平和になれば、そうとう減ると思います。そのためには人種や宗教などにこだわらずに世界中の人々が暮らす事が最も大切だと思います。僕も、違う人種の人などを

見るとあまり話したくないと思ってしまう事があるけれど、そういう一つ一つの小さいことから直していく事が大切だと思います。

戦争はいけない

湖北中学校2年 照山 優太

よく、テレビで見る「戦争」のニュース。テレビで見る度、悲しくなってしまう。 「なぜ、人は戦争しなくてはいけないの？なぜ、人は傷つけあわなくちゃいけないの？」と、疑問に思います。

戦争で、勝った国は確かに利益があります。でも、負けた国は違います。戦争に勝つためにたくさんのお金を注ぎこみ、武器や兵器を買います。負けてしまうと、国が貧しくなってしまう。そうすると、食料がなくなり、死んでしまう人がたくさんです。僕は、その光景をテレビで見る度に、心が痛くなります。人々が栄養失調で命を落とす姿は、もう見たくありません。

僕は、友達とたまにけんかをします。理由は、ほんのささいなことです。戦争も、きっとささいなことがはじまりでしょう。でも僕は、けんかをしても、すぐに仲直りをします。戦争をする国々も、すぐに仲直りをすればいいのだと思います。話し合いで解決すればいいのです。武器や兵器は使ってはいけないと思います。

戦争をして、一番悲しいのは、家族や親族を亡くすことです。兵士として戦場へ行き、そこで生きのびる事ができたなら良いですが、そこで命を落とすなんて、悲しすぎます。反戦すると、昔の日本では捕まってしまったりしていました。僕は、戦争のない時代に生まれることができよかったです。

僕が思うに、戦争をして、一番被害があるのは、無関係な国民だと思います。さっきも述べたように、軍として、国のために戦うのも男性の国民、男性が戦に出ている間に、子供たちを守るのも女性の国民となり、多くの人々が影響を受けているのです。

小・中と国語の授業で戦争についての作品を読んできたり、テレビや本などで、自分で戦争について学んだりしてきました。僕が学んだ作品の中では、残念なことに、幸せなお話ではなく、すべてにおいて悲しいお話なのです。きっとこれから、戦争についてはもっと学習するでしょう。でも、戦争をして幸せになった人の話は、一生めぐり合わないでしょう。戦争は人々を幸せになんて絶対にしません。不幸にさせるだけです。

日本は何度か戦争をしてきました。その中でたくさんの方が命を落としました。日本は

戦争をしない憲法があります。だけど、もしこれから日本が戦争をしそうになった時は、この事を忘れないでほしいです。「戦争」で幸せになる人なんて絶対にいない。「戦争」はたくさんの人の幸せをうばう。「戦争」はたくさんの人の命をうばう。もう日本には、過ちをくり返してもらいたくないです。

僕が活着ている間、いやこれから先、全世界において「戦争」がなくなることを心から祈っています。

我孫子市戦後60周年記念事業参加者杉本さんの発表を聞いて

布佐中学校3年 赤沼 駿

杉本さんの体験談を聞いて、やっぱり原爆ってすごいもんだなあと思った。60年経っても忘れることができない人、泣く人が未だに沢山いること。国家レベルでの追悼がまだ続いていく。たかが、1発の爆弾で何万人も死んでしまった。その原因である戦争も、原爆を作ったのも人間なんだよな。もっとそのことを考えていかなきゃとおもいました。

布佐中学校3年 酒井 翔馬

60年経った今でも、沢山の人が戦争を忘れてはいないってことは、戦争が本当に人々の心を傷つけたという過去の時間につながる。私も焼け野原になったヒロシマ、血が染みこんだヒロシマを忘れてはいけないということを考えさせられた。

平和の大切さを、今、60年経った今もう一度考えるべきなのだろう。

布佐中学校3年 山崎 絵里

私は杉本さんの話を聞く前から、広島原爆の事は知っていました。おじいちゃんが戦争を経験しているからです。私は何度もその話を聞きました。

戦争は嫌いです。杉本さんの話にもあったように、戦争は多くの生命を奪ってしまいます。戦争はあってはならない。未来にこんなことはないと思うけど、私は平和を願っています。

布佐中学校2年 濱田祥太郎

私は戦争について、戦争は国と国との争い、また、国の野望により起こるものであると思います。小さく言えば、譲り合うということができていれば、戦争はおろか国境は無く

なると思います。お金、土地、野望のために世界の人の命を失わせないでください。

布佐中学校2年 森田 菜摘

私は、今日の体験談を聞いて、戦争は本当に人の全てを失うものなんだと改めて実感した。スライドの写真も戦争の悲惨さをすごく出している思ったより「グッ」とくる写真があった。戦争を無くすには、まずは自分より相手のことを考える事だと思う。世界のトップにいる人はこの事を考えてほしいと思った。

伝えたい言葉

布佐中学校1年 野村 馨

去年の12月。私は迷いつつも、あびこ市民ミュージカルに参加することを決意した。一昨年は歌やダンスの自信が無く、参加しなかったのが、今回こそは！と思っていたのだ。それに、歌の広場や合唱団で知り合った子も参加すると言っていたこともあって、なお参加しようとする気が増した。

1月の下旬にオーディションは行われた。ミュージカルの内容は、あのシェイクスピアの四大悲劇の一つ「ロミオとジュリエット」が原作になっている「バレンタインドリーム」という作品だった。大まかなストーリーは知っていたが、詳しい所は知らなかったのが、図書館から本を借りてオーディション当日までに読破した。それでも今回の作品は、原作のものとは逆にラストは2人が生き返る設定になっている。

ちょっと不安になりつつも、私は参加しようと誘った後輩と一緒に並んで座った。

やがてオーディションの時間が来て、受験者はステージにあげられた。そして、ダンス・歌・演技の順に行った。やはりみんな個性的なキャラを出していて、どのオーディションも一人一人見物だった。全員が同じ我孫子に住む市民だとは思えない。私はこの日だけで圧倒されてしまった。

オーディションの翌日には結果が出て、1ヶ月程キャストのオーディションの日々を送り、4月頃にはキャストが発表された。私は中学1年なので、ギリギリで大人組に入る。そのため、競争率はかなり高かった。役も、名前さえ無い役ではあったが、数少ないセリフシーンの中で3回も出る事ができるし、ステージに上がる回数はなかなか多かった。頑張るやる気が出てきた。

5月になると、8月の上演のPRとして、色々な行事で発表するようになる。今月は水

の館の広場で行われる、エンジョイ手賀沼だった。発表は合唱で、メインテーマ曲とエンディング曲を歌った。MCの人達もすごく上手で、待ってる間も見とれてしまった。お客さんもたくさん集まってくれて、たくさんの拍手をもらうことができた。

発表が終わった後は、保護者会が始まるまで自由に遊べる時間になった。キャストが決まった今では、その役ごとや役のチームごとで仲良くなってきていた。やっぱりまだ全員と普通に喋れるわけではないけれど、私は同じ役同士の3人で水の館を楽しく見物していた。4階の展望台からテガヌマンの劇を見ておもしろおかしく話したり、下にいるメンバーのみんなを見つけてたり。私はこの時初めて3人とも全く違う学校なのに、話していることがすごく不思議に思えた。そして、すごく嬉しかった。

幅広い年代で話すってというのは、私にとって新鮮で、学校とは違う感覚を持てた。参加して良かった、って最初に思った日だった。

そして、稽古の方も順調に進んでいた。もちろん、まだまだ稽古のたりない部分もあった。そこは居残りで稽古を受けたり、抜き稽古を行ったりした。もうそれぞれのダンスの振り付けは終わっていて、一応全てを通すことができていた。通し稽古も組ごと（かわ組・そら組・Jr組の3組）にわかれて行うようになった。が、やはりどうしても今は台本を読み込むことが最優先で、しかもセリフを覚えてなりきらなくてはいけない私は、とにかく毎日台本に噛みつく毎日だった。とりあえずダンスより歌より何より、全ての流れと役の演技を覚えることがまず最初だったのだ。私は、大人の人達に教えてもらいながらも少しずつ通し稽古について行けるように努力した。

何とか通しの流れについていけるようになった。が、次の課題は苦手なダンス。嫌いじゃない。むしろダンスは好きなのだが、今回の市民ミュージカルが初体験の私には、苦手なものなのだった。かといって、他の歌と演技がずば抜けて上手いわけでもない。とにかく少しずつどれも伸びるように、全て努力するよう心がけていた。居残りの稽古にも必ず出て、土日とは違う月曜の夜の稽古にも欠かさず参加した。とにかく少しでも慣れるように、上達するように、その一心だった。

すごく上手くなったわけではないけれど、ダンスにも体がついていけるようになった。そのためか、だんだん通し稽古にも余裕が生まれてきた。目立つ役という訳でもないの、ゆっくりと息を抜く時間もあった。もっと詳しくやれるようになってきたのだ。そして、その時初めて頭の中に新しい言葉がはいった。それは、この市民ミュージカルの「バレンタインドリーム」が、戦後60周年記念平和事業だということ。通し稽古が終わった後の演出家からのダメ出しの終わりに、つけたされた言葉だった。あまりにも今まで必死だったため、その事が頭に入っていなかったのだ。

それからの通し稽古で私は、1シーン1シーンを見ることで、すごく心に沁みってくるものがあつた。争い、愛情、生きる楽しさ……。私にたりなかつた何かを思い出せた気がした。そのたりなかつたものは、今でもわからないけど。平和という大切さが、このミュージカルを演じることでわかる気がした。だからこそ、このミュージカルをたくさんの人に覚えてもらって、たくさんの人に理解してほしい。もっと稽古に力が入つた。

本番は無事に終了した。大成功だつた。みんなで、成功を祝つた。泣いた。喜んだ。今までで一番平和の大切さと、生きる楽しさがわかつた気がした。それと同時に、仲間と別れるのが哀しくなつた。悲しさと嬉しさが混ざつた感情だつた。

本番が成功したのは、何にも変えられない嬉しさだつたのは、嘘じゃない。本当に本当に嬉しかつた。でも嬉しいけど、私は一緒にこれまで頑張つてきた仲間達が大好きだつた。困つてるときは声をかけてくれて、相談に乗つてくれて。一緒にたくさんたくさん遊んで。みんなでたくさん喋つた。稽古だけじゃなくて、終わった後もみんな楽しんで。一人一人が個性的で、すごい面白い人ばかりだつた。私は、みんなと頑張つてきた日々とみんなの事を、絶対に忘れないと思う。これからも何度も思い出すと思う。それがこれからの支えとして、私の名前を呼んでくれる大切な仲間だと信じて。これからも頑張りたい。まだまだ知らない人達に伝えたいことがたくさんあるから。

私が考える平和---ヌチドゥタカラ---

湖北台中学校3年 與五澤 佳納

「ヌチドゥタカラ」。皆さんはこの言葉の意味を知っていますか？この言葉は沖縄の方言で「命は簡単に捨てるものじゃない」という意味です。

私はこの夏、戦後60周年を迎えたのをきっかけに、「ひめゆりの塔」についての資料を読みました。彼女たちは戦争に行き傷つた人々を手当てするためにかり出された女学生で、年は私と同じ年の子がほとんどです。彼女たちの中には、敵軍にやられてしまった人もたくさんいますが、逃げ場を失い自決した人がほとんどです。「お国のために死ぬ」、当時の日本を支えていた、スローガンのようなこの言葉、本当に皆そう思つていたのでしょいか。死にたいなんて本当に心から思つた人なんて、一人もいなかつたと思います。それでも、死にたくないのに自決してしまつた彼女たちには、一体どのような想いがあつたのでしょうか。

ある日私は先生に、

「あなただったら国のために死ねますか？」

と聞かれたことがありました。もちろん私は

「絶対に出来ません。まだまだやりたいことがたくさんあるからです」

と答えました。

年齢が同じ彼女達だって、まだまだやりたいことは山ほどあったと思います。家族だっているし、友達もいるし、好きな人だっていたと思います。それなのに、自ら命を絶った。

戦争とは、平和や命の大切さ、本当に大切なものを見失い、自分さえ見失ってしまうものなののでしょうか。彼女たちは死にたくないのに「お国のために」死以外の道はなかったのです。なぜなら、彼女たちは日本と言う国を、日本の家族を誰よりも愛していたからです。

戦争は、何て怖いものなののでしょうか。本当に大切なものは何かわからなくなり、命がどれだけ尊いものなのか、わからなくなってしまいます。

沖縄戦で、わずかに生き残った、ひめゆり部隊の人の証言によると、ある逃げ場を失ったグループは、崖から自決しようとしていました。誰もが泣きながら、大切な人の名前を叫んだそうです。私はその場面を想像すると、あまりの怖さと、こみ上げてくる悲しさで、しばらく動けませんでした。「家族に会いたい」、「何か食べたい」、「学校へ行きたい」、想いはそれぞれだと思いますが、彼女達に共通する想い、それは「もっと生きたい」、これが全てだと思います。

私は生きてくても生きられなかった人たちの分まで絶対に一生懸命生き、今生きていることに感謝しなければならないと思います。一人の人間が悔いなく生き抜き、命を全うする、これが平和の正体だと思います。

しかし今現在、人生を簡単に諦め死んでいく人が増えてきています。死のうとする前に、生きてくても生きられなかった人たちのこと、考えることが必要です。また、生きている一人一人が命の大切さ、平和の大切さについて考えていかなければならないでしょう。

「ヌチドゥタカラ」、命は簡単に捨ててはいけないものです。私が考える平和は、この言葉が全てです。

人々の大切なもの

久寺家中学校2年 古内 拓

僕には、夢がある。誰とも似ていない、僕だけの夢だ。今、僕は、その夢があるからこ

そ、未来への希望も持って生きていける。それは、皆も同じだと思う。しかし、その夢をつぶされた人たちは、一体どうやって生きていけるのだろう、と考えることがある。少なくとも、自分の生きていく道に夢や希望があるから、人は生きていけるのだろうと僕は思う。その夢や希望さえもうち砕くのが、戦争だ。

僕達は、戦争を体験したことがないので、詳しいことはわからない。しかし、体験談を聞いて、予想をすることはできる。例えば、僕の祖父、祖母の体験談を聞いて…だ。

「学校にいるときは、警報のサイレンが幾度となく鳴って、何度も、死ぬ、っていうことの恐怖においやられたよ。その時のことを思い出すと、今の平和とは、程遠いものがあるわ。夢や希望なんかは、到底持てなかったわよ。」

「おじいちゃんは、丁度戦争に駆り出される所で、戦争が終わったんだ。その時、あー、自分は死なずにすむんだ、って安心したね。おじいちゃんには、先生になりたいっていう夢があって、その夢がつぶされず、とてもうれしかった。戦争は、なんでも奪っていくからね。おじいちゃんも、2人の兄を奪われたんだよ。」

話を聞いていて、絶望感を覚えた。自分のものだけではなく、他の人も奪っていく。そんな戦争が、あってはならない。そんな感情も僕の中に生まれた。

しかし、この悲しみを生まれさせたのは、一体誰なのだろうか？答えは簡単である。僕達、人間だ。人の心の中にある、欲望だ。自分の欲望を果たしたいが為に、戦争を起こすのだと考えられる。今、よく、

「〇〇の平和の為に戦争をするのだ！」

と言っている人がいる。しかし、戦争に平和など、存在するのだろうか？戦争は、奪っていくだけで、残していくのは、悲しみや憎しみの感情だけだ。人々の平和など、そこには存在しないのだ、と僕は考える。

今、日本は、確かに平和だといえるかもしれない。しかし、この世界のどこかで、まだ、戦争や争いは起きているのだ。自分たちの夢、そして希望を失わないように、僕達は一生懸命に、その問題に取り組んでいくべきだと思う。

人の夢、希望は奪っていったいいものではない。その夢、希望があって、人は自分の生きていく道に真っ直ぐに歩いていけるのだと思う。その大切なものを守る為に、自分から、そして皆で、平和ということの意味を、日頃から意識したい。そうすれば、戦争が間違っただけなのだという事を、はっきり実感できるからだ。

僕には夢がある。それは、世界中の人々と、何の隔たりもなく、笑って手をつなぐことだ。

戦争と平和について

白山中学校1年 郷田 親作

戦争は、この世の中で絶対にやってはいけないことです。しかし、今も世界中のどこかで争いがあり、人が人を苦しめたりしています。

今年、戦後60周年ということで、広島で原爆をうけた犠牲者の方の写真や資料を見ることができました。最初に見たときは、思わず怖くなり見るのをやめたくまりました。着物が肌に焼き付いている姿・皮膚が垂れ下がっている姿・体中が全部焼けている姿・親を一生懸命探している子供の姿・家がつぶれてその下敷きになっている姿など、たくさん見ました。

そして、テレビでは生き残った人たちの話を聞きました。印象に残った話が二つあります。一つ目は、子供といっしょに朝ごはんを食べていた時に、原爆が落ちて、子供たちだけが家の下敷きになってしまいました。お母さんは助けようとがんばったけど、火がまわってお母さんだけが生き残りました。そのお母さんは去年亡くなったそうですが、8月6日の原爆の日には、毎年泣きながら「ごめんね。お母さんをゆるして」と言っていたそうです。

二つ目は、学校で鬼ごっこをしている時に、原爆が落ちてきて鬼をしていた人は、木の陰にいた事と目を手でおおっていたので、助かったそうです。逃げていた友達は、被爆して亡くなったそうです。

助かって、それぞれずっと心に傷を持ちつづける人、いまだに体に、放射線による後遺症がまだ残っている人がいるそうです。その体験された方も高齢となり、実際に被爆を受けた人がだんだんといなくなりました。こんな人を苦しめる原爆というものをなぜ作ったのだろう。それなのに、まだ世界中で隠しもっていたり、研究や開発が行われています。どうして、作るんだろう。どうして、大勢の人たちを殺したいんだろう。そういう国の人達に、原爆でおきた悲しい出来事を見てほしいと思います。罪のない人たち、子供たちが犠牲にならないように、戦争のない平和な世の中になってほしいと思います。

戦争が作った悲惨な出来事を忘れないように、僕たちがこれから先、未来に話を受け継がなければならないとおもいます。

先日、僕の学校で合唱コンクールが行われました。母の隣にいたおじいちゃんが「平和でいいねえー。私が中学生のときは、皆で合唱といえば軍歌だったんだよ。好きな歌が歌えていいねー」と言っていたそうです。二度と戦争が起きないように、また世界が平和であることを願います。

戦 争

白山中学校2年 高岡 大

僕達は今、平和な日本で生活できることが普通だと思って生きています。しかし、戦時中の人々は僕達が生きている平和な日本を夢見て生き抜いていました。「もうすぐで戦争が終わる。食べ物もろくに食べられない苦しい現実から解放されるんだ」と、戦時中の人々は思いながら、空襲からおびえる毎日を過ごしていたと思います。空襲で家を焼かれ、財産が無くなり、大切な家族でさえも、一瞬で無くしてしまう人もいたのではないのでしょうか。僕の祖父も戦争体験者なのですが、当時のことを鮮明に覚えていました。祖父は零戦を操縦していて、仲間の零戦が次々に撃ち落とされていくところ、前方から敵機が接近し、それを撃ち落としたことを話してくれました。この間、戦後60周年ということで、テレビで特別番組をいろいろとやっていました。当時の人々はどんな目にあい、どのように生活していたのか、などが番組を通してよくわかりました。いつもと変わらず、普通に生活しているところに、突然、空襲警報が鳴りだし、アメリカ軍戦闘機の空襲が始まるのです。空襲が終わると被爆地は一面焼け野原と化しています。こんなことが毎日のように起こっていました。空襲の被害を受けた人は悲しみしか残らないのです。

今の日本で、戦争は有り得ませんが、60年前までには実際にあった出来事なのです。それに、日本だけではなく、世界中のどこかで今もなお戦争が続いているのです。日本には今でも戦争の被害を受け続けている人がいます。原爆の放射能によってもたらされる病気が被爆した人たちを苦しめているのです。

戦争とは、平和になるためにすることで人を不幸にさせたくてしているわけではありません。しかし、戦争をすれば必ず誰かが傷つき、不幸になります。平和の為だからといって戦争をしても、結局は不幸になってしまうのです。僕達の未来で、もうそんなことは二度としたくはありません。僕達がおとなになったら、世の中を僕達の手で変えていき、守っていかなくてははいけません。そして僕達の未来を戦争が起きるような未来にさせませんが、今は何を言っても僕達はまだ子供です。僕達に今、戦争を無くすのにできることがあるのかどうかはわかりませんが、「戦争をして幸せになるということは決してない」ということを世界中の人に理解してもらいたいと思います。近い将来、一日でも早く平和な世界が訪れるように、世界の輪をつなげていきたいと思います。

平和の基準

流経大付属柏高校3年 深水 実香

平和の基準とは一体どこか。戦争がないことか。テロが起きないことか。それとも通り魔などの犯罪がなくなることだろうか。一言で「平和」と言っても、そのレベルは様々だろう。このようなものに基準をつけること自体おかしいことだろうが、平和というものは人それぞれで捉え方が違うはずだ。

もし戦争がなくなるということを平和なことだと考えるとして、それは間違っていないはずだ。誰もが「平和とは何か」と訊かれれば「戦争がなくなること」と答えるだろう。しかしそれは本当に考えていることだろうか。私達の世代の人間は、戦争というものを体験していない。だが私達は戦争がどのようなものか、知識として知っている。歴史の授業で学ぶものでもあるし、戦争をテーマにしたテレビなども観ているからだ。しかしそれらが実際に起こった事だと頭では認識していても、本やテレビを通じた時点で、それは限りなくフィクションに近くなる。どんなに残酷な殺戮の話聞いても「そんなことがあったのか」で終わってしまう。戦争の悲惨さも辛さも事実として知っているだけで、自分達には関係のないことだと頭のどこかで思ってしまうのだ。平和とは戦争がなくなること。そのように言っても、実際に起こった出来事として把握しきれていないこの状態では、自分で考えたものというのではなく、反射的な受け答えでしかないだろう。しかし今、戦争は終わったこと、もう関係のないことだとは言いきれなくなった。日本の自衛隊派遣。安全だと言うものの、限りなく戦争に近いところにいることには変わりない。それでも今はまだ、日本に戦争がやってくることはないだろう。むしろテロのほうが戦争よりも身近なのではないだろうか。

私達の世代でもリアルタイムで知っていること、テロ。日本ではまだ起こっていないが、各国でテロによる被害者が多数出ている。ならば、テロがなくなれば平和になるのだろうか。もちろん、テロが起こっていたときよりは平和になったと感じるのだろうか。自爆テロなどによる目を見張るような大きな被害がなくなる。それはとても平和なことだ。それは間違いない。しかし、本当にテロがなくなるだけで平和になったと言えるのだろうか。

戦争よりも事実として把握しており、テロよりも身近なものとして感じる。それは当たり前のように起きる犯罪だ。強盗事件や殺傷事件。犯罪に大小をつけることは不謹慎だと思うが、小さな犯罪の部類に入るだろう、万引きやひったくり。そのような犯罪全てがなくなれば本当の平和になるのだろうか。何も事件が起きず、誰も傷つかない世界。平和な世界。しかしそれは、絶対にありえない世界。戦争やテロがなくなることよりも難しいこ

とだろう。みんながみんな、犯罪を起こさないように気をつける。そんなことをしても無駄だと私は考える。大なり小なり、人間がいる限り犯罪はなくなる。憎しみや怒りの感情を消すことは、何も感じなくなるということに等しい。このようなマイナスの感情があつてこそ、喜びなどのプラスの感情が生まれるからだ。

そうすると、小さな犯罪はもちろん、戦争もテロも完全になくなるということはないのだろうか。平和な世界が生まれることもないのだろうか。しかし私は今幸せだ。私の周りには平和だと声を大にして言える。戦争もテロも犯罪も、この世界では多発しているのに、普通に生活している分には平和だと感じる。「～がなくなれば平和になる」このような考えをしないから、私は平和を感じているのだろう。平和の基準。戦争がなくなること。テロがなくなること。犯罪がなくなること。それはもちろん当たり前のことだ。しかしもうひとつ重要なこと、それは自分が幸せかどうか、周りが幸せかどうか、ただそれだけではないだろうか。まだ学生でしかない私には、戦争を止めることも、被害者の救済をすることも出来ない。自分の平和を考えるだけで一杯一杯だ。もちろん、戦争やテロがなくなればそれにこしたことはない。しかしそのための手段を私は知らない。これからの人生でいろんなことを学び、経験していくことによってその手段もわかってくるのだろう。そして私達が大人になったとき、戦争を起こさないような、テロを許さないような、そんな日本を作っていけるようにしたい。

平和の基準とは人それぞれだ。私は、人が幸せになることが平和になることだと思う。どの国でも幸せを、そして平和を感じる人が増えるように。それが平和への第一歩だ。

戦後60周年と自分

取手松陽高校2年 鳴瀬 有香

今年戦後60周年を迎えた日本。戦争を直接知ることなく私はこの17年間過ごしてきました。私自身戦争を知るにあたって、学校での授業、沖縄修学旅行での壕体験・ひめゆりの塔見学、そして夏。我孫子市主催による戦後60周年記念平和事業「バレンタイン・ドリーム」に参加させていただいた事が大きなものでした。[ロミオとジュリエット]が原作となっていた今回の作品。悲劇がどんどん重なっていく・・・そんなイメージが強く、始めはただただかわいそうでたまりませんでした。台本をもらい読んで見ると、やはり若い男女が偶然に出会い、純粋に恋をただけである出来事がたくさんの悲しみを生み、悲劇の波にのまれていて2人の姿が悲しくてたまりませんでした。ただ、今回やることになった

作品はラスト復讐という気持ちが消えたことにより、生き返ってハッピーエンドとなっていて悲しみだけで終わらない、メッセージのこもった作品に仕上がっていました。まだ作品の深さをまったく理解しきれていない状態でしたが、永年恨みあっている家柄同士と知りながらも、その逆境に負けず自らの運命とともに立ち向かっていく主人公マリエット（原作ではジュリエットにあたる）を絶対にやりたいなと思いました。オーディションを終え、希望通りマリエット役をもらえた時は凄く嬉しいという気持ちと同時に、台本を初めて読んだ時の衝撃を見てくれるお客さんに伝える事ができるかどうかという不安におそわれました。稽古が始まると、そんな不安におそわれている暇はなくなり、無我夢中に踊りを覚えたり、位置を確認したりに必死で内容について考える事が減ってきていました。

踊りも演技も初めてだった私には、練習の1回1回が新しい知識であり、練習が怖くなる事も多々でした。でも、そんな時助けてくれる人達がミュージカルの仲間にはたくさん居て、何度も支えられました。ダンス・演技をアドバイスしてくれた方、練習の度「頑張ってるね」と声をかけてくれた子供たち、1人の戦いだと思い込んでいた私にとって、そんな仲間の優しさにとっても感動しました。本番近くになり、通し練習が始まるとこのミュージカルの伝えたいメッセージについて深く考えるようになりました。このミュージカルを見終わった後、ただ「途中まで2人がかわいそうで・・・でも最後ハッピーエンドになってよかったわ」という伝え方では終わりにたくありませんでした。2人の出会いは悲しいものではなく、犬猿となってしまっていた二つの家を向かい合わせることをしました。そこから、決闘が始まってしまったのは仕方ないといっではいけないかもしれないけど、向き合うためには必要なことだったんだと思いました。2人は両家の争いに思い切りのみこまれてしまったけど、その犠牲を怖がらずに立ち向かった事が、最後復讐を繰り返す事の無力さを知れた要因だったと思いました。これは、今の時代にもしっかりと受け止めるべきメッセージではないでしょうか？復讐、復讐という言葉が重過ぎるのであれば、今でいう仕返し。これは、その時の勢いだと、一時的なやってやったという満足、優越感で自分自身で正しかったと思いがちです。でも、落ち着いて考えてみればそれは無意味であり、逆に自分自身が傷つく形になりやすいです。他に形はないのでしょうか？何かを失ってからでは遅いんです。「人を恨む者には、復讐が連なって自らを不幸にし、人を赦す者には平穏が訪れる」「恨みを復讐で返しては平和は訪れない」この二つが大きなテーマとなったミュージカル。戦争というと、今の戦争を体験していない人はどうしても他人事に聞きがちです。

憲法制定により今の日本から、戦争という言葉は日々遠いものとなってきました。それはとても幸せなことであり、他人事になりがちになるのも当たり前だと思います。でも、

第1部 戦後60周年記念 平和祈念文集（小学生・中学生・高校生の部）

日本のニュースから人が亡くなったという話題が消えることはありません。私がやったミュージカルのような、永年の恨みあいなんてことは今の時代滅多にない事だけれど、仕返しをする・・・なんて事は自分自身の周りにはたくさんあることだと思います。身近な事から考え直すことがあるはず、私はこのメッセージを伝えながら、忘れてはいけないと思いました。そしてこのミュージカルを通して、人の暖かさを強く感じる事ができ、他人を思いやる気持ちが人とのつながりも自分自身にも良い方向へつなげてくれる橋となることを学びました。参加してよかったというのと同時に、今回の我孫子市のイベントに参加できた事、嬉しかったです。私自身考えることが多かった1年。また何年か後、戦後記念イベントをやることになったとき、戦争などないのはもちろん、ニュースもなにも平和だと全ての国がはっきり言い切れる世界になっている事を祈っています。